

【1】本稿の資料観

〔1〕本稿では使用する文献をおおまかに次の3種類に分ける。

すなわちパーリの5ニカーヤと漢訳の阿含、およびその単訳経、パーリの *Vinaya* とそれに相応する漢訳律蔵などの原始仏教聖典を第1類とし、ここではこれを「A文献」と呼ぶ。

そして *Apadāna* や *Jātaka*、『根本有部律』などの一般には原始聖典に分類されているが、後期に成立したものと考えられる文献と、経・律の諸註釈書、仏伝經典、アビダルマなどを第2類とし、ここではこれを「B文献」と呼ぶ。これらには次の大乘の経・論よりも成立が遅いものも含まれるが、系統的には第1類により近く、大きく括れば一つにまとめて初期仏教聖典とも呼びうるような文献である。

さらに適宜大乘の経・論や中国撰述の文献も使用するが、これはあくまでも副次的な文献であるから、文字を小さくして表記する。ここではこれを「C文献」と呼ぶ。ただし大乘経論と中国文献を分けて紹介することの方が多い。

本稿は上記の3種類の文献のなかに記載される摩訶迦葉とその妻・パッダーに関するすべての事項を扱う。

〔2〕手順としてはまずA・B文献に記載されている摩訶迦葉とその妻に関する「エピソード」や「記事」を紹介し、その後これらを材料として考察を加えるが、その前にこれら「資料」の取り扱い方の原則を示しておく。

ここで「資料」と呼ぶのは、経や律などの文献を指すのではなく、これら文献に記されている「釈尊伝や仏弟子伝、あるいは釈尊教団形成史の材料となるエピソードないしは記事」を指す。

「伝記」は年代に係わる記事だけではなく、家系や人柄や事績・人間関係などに関するすべてのエピソードが含まれることは言うまでもない。また「釈尊教団形成史」には「釈尊教団の組織」のあり方なども含まれる。要するにここに言う「資料」は釈尊やその弟子たち、あるいは釈尊教団に関係する一切の情報を含む。したがって例えば「資料」には以下のようなものが含まれる。

- ①事績の年代を示す資料；「祇園精舎建設年資料」とか「阿闍世王即位年資料」など
- ②年齢や年数などの数字を示す資料；「釈尊の出家年齢資料」とか「阿難が釈尊の侍者として釈尊に仕えた年数資料」など
- ③家系や姻戚関係などを示す資料；「摩訶迦葉が裕福な婆羅門の家系に生れた資料」とか「阿闍世王の波斯匿王との姻戚関係資料」など
- ④人柄やエピソード・事績を示す資料；「摩訶迦葉が釈尊から半坐を分かれた資料」とか「波斯匿王が若いときには余り熱心な仏教信者でなかった資料」など

以下にはこれら資料すべてをひっくるめて「エピソード」と呼ぶことにする。

また以上のようなエピソードに関して複数の伝承がある場合は、それぞれが独立した「資料」となる。例えば釈尊の苦行年数を「6年」とする伝承と「7年」とする伝承がある場合は、「釈尊の苦行年数—6年資料」と「釈尊の苦行年数—7年資料」があることになり、阿難を提婆達多の兄弟とする伝承と、釈尊の従弟とする伝承がある場合には、「阿難の姻戚

関係——提婆達多の兄弟資料」と「阿難の姻戚関係——釈尊の従弟資料」があることになる。

[3] われわれはすでに本「モノグラフ」第1号に掲載した【論文1】「『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究』の目的と方法論」の中で「本研究の原始仏教聖典観とその取り扱い方」なる節を設けて、その基本的考え方を提示した。それを今簡単に確認すると次のようになる。

第1次水準資料 パ・漢の原始聖典に共通する資料

第2次水準資料 パーリの原始聖典独自の資料で、漢訳聖典とは共通しない資料

第3次水準資料 漢訳聖典独自の資料で、パーリの原始聖典とは共通しない資料

第4次水準資料 原始聖典のアッタカター（注釈書）や、後の時代に成立した「仏伝経典」などの資料

第5次水準資料 現代の研究成果

すなわち先に記したA文献に含まれるエピソードは第1次水準から第3次水準資料に相当し、この中でパ・漢の原始聖典に共通する資料を「第1次水準」とし、パーリ聖典にしか見出しえない資料を「第2次水準」、漢訳聖典にしかない資料を「第3次水準」とするわけである。そしてB文献は「第4次水準」資料ということになる。

例えば先の「釈尊の苦行年数——6年資料」がパ・漢両方の原始聖典に見いだされるとすれば、これは第1次水準資料となり、「釈尊の苦行年数——7年資料」が漢訳の原始聖典にしか見いだせないとすれば、これは第3次水準資料ということになる。また「阿難の姻戚関係——提婆達多の兄弟資料」や「阿難の姻戚関係——釈尊の従弟資料」がパーリのアッタカターや「仏伝経典」にしか見いだせないとすれば、これらは第4次水準資料ということになる。

なおこの水準を設定した時点においては、大乘経論や中国文献に見いだされる資料は念頭に置いていなかったもので、これらは「第5次水準資料」に含まれることになるであろうが、これらを現代の研究成果と同格化することは不適當であるから、「第5次水準」以下の水準設定は見直さなければならないであろう。しかしこれらが必ずしも、現代の研究成果を上回る水準であるとは限らない。

このように水準を設けたのは、上述のように一つのエピソードに関して複数の「伝承」がありうるので、この研究ではそのうちのどの「伝承」を優先させるかの判断基準とするためである。すなわち類似のエピソードに複数の「伝承」がある場合は、原則として上位の「資料」を採用することになる。ただしそれが他のエピソードと矛盾するような場合はそのつど検討を施すことになるのは言うまでもない。パーリ聖典を漢訳聖典よりも上位水準に置いたのは、パーリ聖典はそれ自体の自己完結度が高く、矛盾する資料が比較的少ないと考えられるからである。

なお一般的に原始聖典と呼ばれるものの中にも成立の新古があり、そこで *Apadāna* や *Jātaka* などはB文献としたのであるが、しかしそれでもまだ不十分で、例えば原始聖典に含めたアングッタラ・ニカーヤや『増一阿含経』などに記された資料は、他の例えばディーガ・ニカーヤや『長阿含経』などに記された資料と同列には扱えない場合が多い。したがって上記水準は一応の目安であり、実際にどの資料を採用することになるかは、そのつど検討

することとなる。

[4] またわれわれはこの研究の目的を、「歴史的事実としての〈釈尊の生涯〉や〈釈尊教団の形成史〉の再現を放棄しているわけではないけれども、当面の研究課題としては、原始仏教聖典の編集者たちが、それらを編集したときに思い描いていたであろう、形にはなっていない〈釈尊の生涯〉や〈釈尊教団形成史〉伝承を再構築すること」（上記【論文1】「『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究』の目的と方法論」p.002）としてきた。

科学的な論文としては、原始仏教聖典が記述している表面に現われたエピソードと、その裏面にあったであろう編集者の有していたであろう編集意図を整理分析して、その背後にある歴史的事実を明らかにすることが第一の使命となるであろうが、しかし本稿ではその論述の基本姿勢を、本研究の当初の目的通りに、原始仏教聖典の編集者が持っていたであろう「釈尊の生涯」や「釈尊教団形成史」イメージを再構築することに置きたい。したがってその裏に隠されている史実らしきものを発掘するための作業や考察は副次的なものとして留まることになる。